

## おもしろさを見つける小説の授業

——「城の崎にて」・「蠅」・「赤蛙」を比較し評価する——

仲田輝康

### 一 はじめに

文部省の市原菊男氏は、『国文学』（平成五年五月号）の「国語教育界展望」の中で、新学習指導要領が目指す「新しい学力観」について述べておられるが、その中で氏は次のような指摘をされている。

これまでは先生の教材研究の結果を生徒に伝えることが指導の基本的なスタンスであったと思われる。生徒が活発に発表したりグループ学習をしているように見える場合でも、結果的には、先生の期待している答えが出なければOKが出ないのだからそのスタンスは変わらないと言える。そうした構造が知らず知らずのうちに受身の生徒をつくって来たのではあるまいか。これからは、生徒が自ら問題を発見し、自ら考え、自ら解決していく力を育てるように指導を組み立てることが求められているのである。

市原氏のこの指摘はかなり重要な指摘であるように思う。

私も、氏とは別の理由からではあるが、同じような思いをもっている。

現在、教室での生徒の声が小さくなったということはいく言われる。質問しても、考える前にすぐ、「わかりませぬ」と答えてすまそうとする傾向も見られる。自分の声で自分の思いを伝えるということをしようにしていないように思われる。たしかに、昔から声の小さい子はいたし、自分の意見を言わない子も少なくなかったであろう。また多くの生徒は授業においては受け身であったろう。しかし今の子供たちと昔の子供たちとは、やはりはっきり違ふと私は思っている。それは、今の子供たちは、その延長線上に不登校の子供たちを抱えているからである。

一口に不登校と言ってもいろんなタイプがあるから一概には言えないが、いわゆる古典的なタイプの登校拒否と言われる子供には、その成育の過程で、親や教師の要求に自分をあわせ、自己の欲求を抑圧してきた歴史を持っている子が多いように思われる。その結果、自らの育とうとする

エネルギーをうまく解放することができにくくなっている。竹内常一氏は「子どもの自分くずしと自分つくり」(東京大出版会 一九八七・七)の中で、不登校等の現象の基底にある最近の子供たちの傾向を「学校適応過剰」という言葉で説明しておられるが、教室の多くの子供たちも、不登校の子供たちが抱えているのと同じ問題を抱えているように思われる。教室での声が小さくなったり、すぐ「わかりません」と答える現象の背後に、正答を気にしすぎ、それからはずれることを恐れる気持ち、さらに進んでは自ら考えることに対する白けた気持ちがあるのではないかと思われる。

## 二 単元のねらい

もっと生徒に任せた授業、生徒たちももっと自由に考え、もっと自由に自分の思いを言える、そして生徒自らが育っていくことを援助できる授業、そんな授業をやってみたいと思っていた。

今回やったのは作品のおもしろさを考えることを中心にした授業である。ある作品がおもしろいかどうか、またどのようにおもしろいかということを読む個人によって違う。どの読みが正しく、どの読みが正しくないということはあまりない。その意味で生徒は「正答」を気にしなくてすむ。それぞれの生徒がそれぞれのおもしろさ、それぞれの感動

を発見してくればよい。他人ごとではなく、自分自身で作品に向かい合い、自分自身の感動を見つける、それが本来の意味での文学体験だと思っているが、生徒たちが安心して自由に考えることで、もっと深く作品と向かい合い、そのことを通じて豊かな文学体験、言語体験ができるのではないかと思っている。またこの学習を通して、自己の感性、価値観を認識し、これが自分自身を見つけ出す手助けの一つになればという思いもあった。

## 三 指導の実際

(一) 教材と指導対象および指導時期

今回教材として扱ったのは次の三作品である。

・志賀直哉「城の崎にて」(明治書院『精選国語I』)

・横光利一「蠅」(集英社版日本文学全集からプリント)

・島木健作「赤蛙」(同右)

いずれも小動物を扱った作品で、それぞれ近代日本文学の傑作と言っている作品である。同時に好悪、評価の分かれる作品でもある。この三作品で生徒の好みを全部カバーできるものでもないが、できるだけ生徒の好みに対応できるようにこれら三つの作品を用意した。

指導の対象は、本校一年生五クラスである。一九九三年一月から三月始めにかけて授業をした。

## (二) 授業展開の方針

授業展開の方法として次の三つのことを柱とした。

1 作品の選択―作品の比較―作品の評価という流れで授業をする。

坂本昇一氏は『生徒指導の機能と方法』（文教書院 一九九〇・九）の中で、様々な指導領域において選択の機会を与えることが、生徒の自発性や自己指導能力を育てる上で重要であるということを描いておられるが、そういう意味からも「選択」ということを授業の中に取り入れたいと思っていた。また当然のことではあるが、選択・比較・評価といっても、実際の学習の中では、それぞれがはっきり分かれているわけではなく、たとえば作品を選択するということのなかにすでに評価の観点は含まれている。

2 表現に注目させる。

書いてある事柄を要約して、事柄だけから作品を考えるという弊に陥らないために、作品世界を形作っている表現に目を向けさせたようとした。

3 個人学習とグループ学習とを組み合わせる。

まず個人で考え、それをもとにグループで話し合う。自分の読みを他の生徒の読みと突き合わせることで、それぞれの読みを修正し深めることをねらいとした。

## (三) 授業の展開

○第一時 個人学習（作品の選択）

三つの作品を読み、一番おもしろいと思った作品を選ぶ。

○第二時 個人学習

前時に選んだ作品について、どのようなところがおもしろいと思ったのか、感想（四百字程度）を書く。その際、内容、表現の両面を踏まえて考えるように指示した。

○第三～四時 グループ学習

選んだ作品ごとに四～六名程度のグループをつくり、選んだ作品の魅力について考える。特に何をどう描いているかという意味での表現に注意させた。

○第五時 グループ学習

第三、四時に考えたことを、グループごとに「○○の主題・表現・魅力」という題の文章にまとめる。（この文章はクラスごとに印刷して次時に配布し、次の学習の参考にした。）

○第六時 個人学習（作品の比較）

三つの作品を、内容、表現のそれぞれの面で比較する。

○第七～八時 グループ学習（作品の比較）

第六時の個人での学習をもとに、グループで三作品を比較する。グループは第三～五時のグループと同じ。

○第九時 個人学習（作品の評価）

各自一番いいと思った作品を選び、「○○について」という題で文章を書く。

○第十時 一斉授業

第五時に書いた文章の中からおもしろいものを抜粋し、それらの文章のさわりの部分を印刷したプリントを一緒に読んでいく。(注 このプリントの内容の一部を資料として最後にあげておく。)

#### ○第十一時 一斉授業

指導者の方で用意したプリントをもとに、それぞれの作品について、その魅力を中心に説明していく。

#### 四 生徒の学習の様子

##### (一) 第一～二時

三つの作品の中で一番おもしろいと思った作品を選ばせた。選択状況は次のとおりである。

「城の崎にて」 六六 「蠅」 八二

「赤蛙」 八一

選ばせる前は、「城の崎にて」を選ぶ生徒はかなり少ないであろうと思っていたが、実際にはこのようにおおまかには三等分された。第二時にはそれぞれの選んだ作品のおもしろさについて四百字程度の文章を書かせた。

##### (二) 第三～五時のグループ学習

第二時の学習を受けて、まず、どのような点が面白かったのかを一人一人確認させ、そのうえで何をどう描いているのか、表現に注意させた。例えば「城の崎にて」と「赤

蛙」については、鼠、蛙などの動物や主人公の感情をどのようにに表現しているかということをとらえさせ、それらのことを踏まえてそれぞれの作品の主題や魅力を考えるように指示した。話し合った内容は記録させ、毎時提出させた。読解の間違いを注意することはあまりせず、むしろおもしろい発想をしているところやもっと深めてほしいところに傍線を引いたり、簡単なコメントをつけ、話し合いの内容をそれとなくコントロールした。これは、後の比較のグループ学習でも同様にした。

今回は作品の表現にこだわり、なにをどう描いているからおもしろいのかということを考えさせたが、書かれた事柄だけを抽出して意味付けするのではなく、文学作品としてのおもしろさに目を向けさせようとしたのである。

またこれまでは、グループ学習をさせても、お互いが言った意見を記録用紙に羅列し、意見も言いっぱなしで終わるということになりがちであったが、今回は互いの意見を突き合わせ、考えを深めさせるため、「○○の主題・表現・魅力」という題でグループごとに文章にまとめさせた。文章化するために、生徒は活発に討議していた。

あるクラスの文章から二つ例に上げる。

##### 例①「城の崎にて」

主人公が見たまま、感じたままを率直に淡々と強く主観を打ち出して表現しているところが、この作品の魅力の一つと言えるだろう。例えば一文が短かったり、

比喩表現などの工夫がされてない点などがそうだ。内容面からみると、小動物の生死をとおして、生物の生死について深くみつめ、自分が生きていることに実感している主人公に、読んでいる方がひきこまれていくところに魅力を感じる。

また、内容の暗さを、淡々と率直に書くことによつて、より一層その暗い雰囲気を出している点についてもおもしろいと思つたところである。(B—三班)

### 例②「赤蛙」

筆者の赤蛙に対する見方は、最初は嘲笑の対象でしかなく、表現にしても客観的であり、冷静に一傍観者として主にその場の様子を描きつづけている。しかし、しだいに「不思議な思い」にとらわれていく。筆者は、一途な赤蛙と、何事にも消極的に考えてしまう自分とを比べることを思いついたからだろう。それからの文章は、赤蛙の行動を生き生きと描いており、また、比較的短い文章によつて、臨場感が出ている。筆者自身も、二人だけの空間へ入りこんだ証拠である。そして、赤蛙が死んだ時、この空間がなくなつた。筆者は我にかへつた。赤蛙と会う前と同じく、らい冷静を装つているが、前にはなかつた気迫が感じられる。このような、筆者の心の動きや、蛙との関係がおもしろく、魅力を感じた。

(B—七班)

「城の崎にて」は三つの作品の中では、比較的その魅力

の説明しにくい作品であるが、この作品について例えば例①では、生と死に対する深い認識そのものよりも、そのような認識をしている主人公にひきこまれるところに魅力があると述べている。そしてそのことは「主人公が見たまま感じたままを率直に淡々と強く主観を打ち出しているところが、この作品の魅力の一つと言えるだろう。」と、表現と関連づけてとらえられている。「城の崎にて」という作品を支えているのは実感を中心とした主人公の実感である。主人公の実感で作品をぐいぐいと引つ張つていき、そのことを通して生と死の意味を描いていくこの作品の魅力がこの①の文章ではよくとらえられていると思う。

また例②の「筆者自身が、二人だけの空間に入りこんだ」という読みは、この作品の魅力の本質にかかわるものだが、この読みも「それからの文章は、赤蛙の行動を生き生きと描いており、また、比較的短い文章によつて臨場感が出ている。」という表現分析の延長線上にある。

紙数の関係でここでは紹介しなかったが、「蠅」を読んだある班は、「自分の意志とは裏はらに、偶然という見えない鎖によつてつながれ」ている人間のありようについて触れ、蠅は「ファインダーのような役目を果たし、それが機械を通して見るように、事実のみを伝えてる感じを与える。」と述べている。他のクラスで、「この作品の登場人物は多いが、その心情にはふれず、つきはなしてかいてある。」と指摘した班もあったが、いずれも、人間の存在を

相对化し、無機質に描いているこの作品の本質にかかわる理解であるといえる。

このように、生徒たちは、自由に考える中で、自分たちの読みをつくりあげている。文章表現に拙いところはあるが、いずれも、書いてある事柄だけからではなく、作品世界を形作っている表現を踏まえながら、作品の魅力を語っている。

たしかに、この後さらに、その表現によって結果として描き出されているものは何か、例えば「蠅」において、蠅が「ファインダーのような役目を果たし、それが機械を通して見るように」表現されていることによって何が描かれているのかというような、内容的な突き詰めは必要だろうが、しかしこれらの文章は、これはこれで作品の核に触れる読みをしていると思う。むしろ自分たちが作品をどのようにおもしろいと思ったのかということ踏まえながら作品に向かい合っていることを評価したい。

私が表現にこだわったのは、作品に書かれている事柄だけを順番に押さえていき、そして、作品が描こうとしているのはこういうことだとして概念的な主題を抽出して、作品がわかったような気になる、そのような抽象的な読みをしてほしくなかったからである。そのような抽象的な読みでは、作品が与えるおもしろさ、感動は抜け落ちてしまう。もっと作品のおもしろさを大事にし、作品から与えられる感動を通して、作品の突き付ける問題と対峙してほしかった。

たのである。作品は像（形象）という具体的なものを通して我々に何らかの問題を提示する。事柄だけを取り上げて抽象的概念的な議論をしても空疎であると私は思っている。

### ③ 第六、八時 三つの作品を比較する学習

第六時では個人学習で三つの作品を比較し、第七、八時でそれをもとにグループで考えあった。比較の観点としてあげたのは次の四点である。①表現、②見方・内容、③主題、④その他。おおまかに言えば内容と表現の画面について比較させたわけだが、第六時の個人学習の時点では、多くの生徒はどこから手をつけていいのかとまどっていた。時間的にも無理な面があつて、ほとんどの生徒はちょっと手をつけただけで終わったというのが実際のところである。しかし、比較するということが目新しかったこともあって、熱心に考えていた。第七、八時ではそれを受けてグループで考えあった。苦しみながらも、おおかたのグループが、それぞれの気がついたことや思いついたことを出し合い、にぎやかに話し合っていた。

生徒の様子を見ると、時間が足りなかったようだし、出てきたものも十分とは言えないが、それでも三つの作品を比較するなかで、それぞれの作品の特質をよく考えていたと思う。たとえば「城の崎にて」と「赤蛙」とは、一見よく似たタイプの作品だが、この二つについてどのように考えたのか。あるクラスの記録用紙から一部を抜粋する。

例③「赤蛙」は生物の力強い躍動感を通して生に対する喜びを表しているように思える。それに対して「城の崎にて」は生き物の死の静寂、悲しみを通して生の重さ、大切さを表し、死の寂しさを表現することによって主人公の生きることに對して意欲をもつようになった嬉しさを表していると思われる。

(B—二班)

例④○表現 「赤蛙」 「ばかな奴だな!」「これで六回、これで七回。」といった強い感情の表れ。蛙が感情をもったものであるかのように書かれている。

○見方 「城の崎にて」あくまで客観的。「赤蛙」客観的↓主観的。赤蛙にのめりこんでいく。

(B—四班)

似ているようで違うこの二つの作品の感動の質の違いを、自分たちの言葉でよく語っているように思われる。

#### (四) 第九時 評価の学習

この時間は三つの作品の中で、最終的に一番いいと思う作品、つまり最も評価する作品を選ばせ、その作品について自由に書かせた。一回目の選択に比べて「城の崎にて」を選ぶ生徒がふえている。B→D組までの四クラスでの様子をあげておく。(A組は時間の都合で書かせていない。)

・ 「城の崎にて」 五八 ↓ 六六

・ 「蠅」 六六 ↓ 五五

・ 「赤蛙」 五九 ↓ 五六

生徒の書いたものを具体的に見ていくことにする。

例⑤「蠅」について (B組 女子)

「蠅」を最初に読んだ時よりも、今、読み返した時の方が、前の「面白さ」に、また別の視点から見た「面白さ」が加わってますます魅力を感じる。

初めの、客観的な死、や、冷たい描写といった感想が全く消えたわけではない。しかし、この話を主観的に描いたとしたら、これほど面白かっただろうか。この客観的で冷たい死こそ、この話のトレンドマークのような気がする。そう考えると、ただただ冷たく、客観的とは見えにくく、見えなくなってくる。一人一人の登場人物に魅せられてくる。そして、全部が必要不可欠になる。

「蠅」といった、普段はどちらかというときがわらしくて嫌なものさえ、輝いてみえる。

「死」に対する思いは個人個人違う。けれども、人間同志の妙なつながりを考えずにはいられない。この話を読んで共感するといえは言い過ぎかもしれないが、妙に納得させられたことだけは確かである。

この生徒は第二時の最初の感想には次のように書いていた。全文をあげる。

蠅から見た描写や、個性ある登場人物が面白い。また、一見、意味のなさそうな、「お母ア、馬々」「ああ馬々」といった母子の会話も、これがあることによって出てくる

効果などを考えてみると意味が出てくると思う。

また、取者が「猫背」なものにも効果があるのだろうか。

この後、この生徒は「城の崎にて」と比較するなかで、

「◎はわりと親身になって読めるが、◎はおそろしい程客観的である。」と、広い意味での文体に注目するようになり、最後の⑤の文章では、冷たく突き放して見る見方そのものに魅かれると述べている。最後の、妙に納得させられたという一文にも注目したい。ここで彼女はこの作品に納得する自分を見出し出しているわけで、ささやかではあるけれども、このことを大事にしたいと思う。

同じような例をもう一つあげる。

この生徒は自分の思いを言葉にしようとして、一時間中呻吟していたが、途中で時間がきてしまった。

例⑥「赤蛙の引力について」(D組 女子)

赤蛙の引力、それはいわゆる魅力というやつかもしれない。作者を引きつける、わたしを引きつける。その力は「自然界の神秘」を背負っている小さな生命の中にあった。蛙。ただの赤蛙。人間なら簡単にできることも、できないのだ。能力的には全くすぐくない。

でもその不器用さが、できなさが、引力になる。色つきの夢を見ない作者が赤蛙の波間に没する瞬間の黄色い腹と紅の斑紋とを「妖しいばかりに鮮明」に見る心理がわたしにはよくわかる。赤蛙がもう何度もこんな無益なことを繰り返していたのか、それを考えた時の

作者の思いと、わたしは同調する。

結論 わたしは赤蛙の魅力というものがまだよく

理解できていないにもかかわらず、この作品を何度読んでも感動するのであります。

行きつもどりつするような表現からも彼女の呻吟している様子が浮かんでくるが、途中で時間がきてしまったために、最後のところで、自分の思いを最も単純な形で表白したのである。この文章では表れていないが、この背後には次のような作品理解がある。比較の時間に書いたもの一部を抜粋する。(このクラスは比較の個人学習に二時間あった。)

(引用者注 「城の崎にて」のねずみと赤蛙とは違うと述べた文に続いて) ねずみが死に対して、そのもの自体から逃げるものであるなら、赤蛙は死に対して、それをわかりつつも自分の目標達成のためにはそれを賭すからだ、また二人の作者も観点が全く異なる。志賀が(敬称も何もなくてごめんさい)、自分がねずみやはちの身になってそこから生と死を思うなら、島木は赤蛙を一人の人格として考え、生と死を包みこむ自然界、宇宙のことを思う。赤蛙の死は決してはちやいもりと相まじえることがないだろう。

このような作品理解を通過して、あの最後の感動の表白にいたるわけである。彼女があのような形でこの作品に感動したこと、そしてそれを表現したことを大事にしたい。

作品と向き合うなかで、もっとはっきり自分の価値観を語った生徒がいる。最初に「城の崎にて」を選択し、最後では「赤蛙」に変更した生徒である。

例⑦「赤蛙について」 (E組 男子)

ぼくは「城の崎にて」を書くつもりだったのだけれども、変更して「赤蛙」について書くことにする。

最初に読んだ時は、かなりしつこくて、いかにも売れない小説家書きそうな文だと思った。しかし考えるに、しつこくて何が悪いのだろう。現在の若者達は、「かっこ良さ、さわやかさ」を求め過ぎているのではなからうか。もっと本質的な、つまり魂を求めなくてはならないだろう。そのように考えると、この「赤蛙」には、とても真剣で情熱的な魂がこめられていて、とても素晴らしいと思う。蛙が執念を燃やし続け、流れに飛び込んでいくその姿に、感動しない人はいないと言え思われる。僕もそこに動かされたようだ。作者は蛙のひたむきなすがたに魅せられ、自分の生活、人生を肯定的にとらえるようになった。一番肝要なのは正にそのことだと思う。単純といえば単純である。しかし、単純で何が悪いのだろうか。人生にある可能性を見い出して、ひたむきに生きていくのは素晴らしいことである。「城の崎にて」や「はえ」に、そんな姿勢があらわれているだろうか。生きていく原動力となるものを与えてくれる小説が、僕はとてつもなく好きだ。

そして「赤蛙」が正にそれなのである。

彼は「赤蛙」という作品と向かい合い、自分の感動と向かい合うことによって、自己の価値観と出会っている。彼は自分にとつての「赤蛙」を語りながら、自己の価値観を語っている。私は、むしろそのことを今は評価したいと思う。

## 五 まとめにかえて アンケートより

生徒たちが第五時に書いた「〇〇の主題・表現・魅力」という文章を抜粋して印刷し、第十時の学習でいっしょに読んでいった。その後でアンケートをとり、次の項目について自由に書いてもらった。(ここまでの段階では教師の方から作品についての説明は何もしない。)

- 一 グループで学習したことについて
  - 二 友達の意見を印刷して配ったことについて
  - 三 三つの小説を比較して読んだことについて
  - 四 授業の最初と最後とで、作品の読みが変わりましたか。変わったとしたらどのように変わりましたか。
  - 五 その他授業に関する感想を自由に書いてください。
- たしかに、教師の側から何も説明しないと、生徒が自分勝手な間違った読みをしてしまうのではないかという不安はある。しかし、アンケートの回答を見ると、生徒たちが彼らなりに、友達の意見を参考にしながら、自分の読

みを修正している様子がある。一の項目について「グループでよむことで自分とはちがう意見をしることができたのでよかった。」という類いの答えを書いている生徒は多くいた。

グループで討議したことも彼らの読みを修正し深めさせているが、他のグループの文章を印刷して配ったことは、生徒にはかなり刺激になったようで、二の項目については「同じ学年、同じ年齢の人たちが、どのような目で作品を見つめ、どのような表現でそれを伝えようとしているのかということがわかってとても刺激になった。」と答えたり、「ぼんやりと思っていたことが言葉になっていて感動した。」と答えたりしている。「ショックだった。」と答えた生徒もいる。それぞれが友達の言葉を参考にして作品認識を深めている様子がある。

授業に関する感想で「先生があまり話さず、自主的に考えさせたところがよかったと思う。」と書いた生徒や、「グループを組んで人の意見をきき、共に考えていったことにより内容が分かってきた。先生におしえられるというより、自分で考えるところがよかったと思う。」と答えた生徒がいる。自分で自由に考えてみたいという気持ちはおそらく多くの生徒がもっているであろう。似たようなことを書いていた生徒はかなりいた。今回私がやったことは、生徒の学習活動を組織することだけで、最後の時間以外はこちらからの説明、解説はしなかった。先に書いたよ

うに一部コントロールしたところはあるけれど、後は生徒の自由な活動に任せた。むしろ自由に考えられることで、生徒たちは自分の中で作品を深めていったように思う。「フランクに意見を言いあえることで自分の小説の許容範囲が広がって、板書の授業よりいろいろなことが自分で考えられてよかった。」と書いている生徒もいる。

生徒だけに任せて小説がちゃんと読めるのかという不安はあるかもしれないが、生徒同士で話し合う中で読みの修正はなされていく。自分の答えがあっているかどうかということに気をせず、自分でもむしろさを発見し、おもしろいと思うことをおもしろいといえる、そのこと自体が大切なことであると思うし、むしろその中で生徒たちの思考の幅も広がっていくのではないだろうか。

生徒の書いた文章を見ると、彼らは作品のおもしろさを語ることによって、当然のことではあるが、自己の価値観と出会っていることがわかる。今の子供たちにとってはこのことが大事なのではないだろうかという思いが強い。自分の価値観や生き方とは何の関係もないところで、作品の正しい読みや深い理解を求めるところよりも、正答か誤答かという枠から解放されたところで作品の感動と出会い、その感動と向き合うこと、それはつまり自分自身と向き合うことであるが、そのことが必要なのではないだろうか。

私たちが不登校の生徒から学んだことは、まず彼らのありのままの姿をそのままに認めること、そして彼らの中に

## 資料 第一〇時のプリントからの抜粋

現代文「城の崎にて」(一編)、「赤蛙」について

一九九三・三・六

### 〇「城の崎にて」

一生を物との出会いによって変化する主人公の心情も納得できるうちに自然にできていよう。わざとらしい哲言の中みでせが現実にある主人公が、やはりこの作品の骨力だと思ふ。

(B) 一 一死の淵に立った死者は、様々な生き物の死を通して、その死の生者の死悟としてとてえ

六 この語には、「終始一死」がつまみこらている。それは主人公の苦しき考えが、いつ強

りなく死に近いところにあるからだろう。

(D) 一

〇「一編」

八 動物中で全く生き延びていない人物が「一編」に與ることよりの愛を保持し、そのこ

とより、自分の意志を主張するには、偶然という身えない難によつたなれば、誰か人物は人

と向らうか形で保持することになることを感した。

更に、この語には「一編」という死にはいけなく登場人物がいる。この物事を考えなくては

なくこの存在にたいし、語を各論的に見るべきである。また、フィッシャーのような内容を

異し、それが難を通過して見ようとする。事實のみを伝えてくる感とを与え。

九 当然前にそのまゝ書くはずの人物の生が最初の全半想でない思想である。その断

ち切れ、その神のむなしさ「びき」の鏡の存在を「一編」でたせたい。

(B) 一 〇 まずこの内容のおもしろさは、最初、異変に與つていく中でほとんど存在がなくな

はずの鏡最後には「一番大きな存在になつた」と行ある。(B) 一 (二) 日は、色々な動物

を聞かしていいのだからそれを鏡が全前期にせしめてたのである。

(C) 一

### 〇「赤蛙」

一六 小きくかつ鮮明な赤色がより「一編」(生)というものを考えさせた後、「一死」で方法

次第に水に似てい込まれていく姿が「死」というものを強に訴へる。しかし、死者は

それによって生きた感らしい「一死」を描いているのではなくあくまでも鏡で神聖な「生

」を描いているのだと思ふ。

一八 賣賣のために賣物、難を歌を唱っていた「私」は、赤蛙が川に飛び込む瞬間、その

難を感得する同時に、彼の力強さを感した。それが「私」を赤蛙にひきよせた主眼である。

必死の行動の末、彼の力強さを感した。それが「私」を赤蛙にひきよせた主眼である。

生かすもの、殺すもの、そうして世界の見えかたの中で、赤蛙の死は消滅的なものでは

ななかつた。「生」と「死」とは即ち生かすもの、殺すもの、それらに比しては「死」は

「生」に比べて、即ちのサケルにみよられるものない力強さがある。それらに比しては「死」は

消滅的なものではななかつた。「生」と「死」とは即ち生かすもの、殺すもの、それらに比しては「死」は

ある自ら育とうとするエネルギーが解放されるのを待つと  
いうことの大切さであった。私たちが彼らに對してなすべ  
きは、ああしなさいこうしなさいと教えることでは決して  
なく、彼らが自ら育とうとすることを援助するということ  
であった。教室の生徒たちの白けた雰囲気には様々な要因  
があるうが、彼らが自分の思いを自分の思いとして感じ、  
それを表現する、それもそれらのが安心してできる、  
そういう場を保証してやる必要があるのではないだろうか。  
作品の読みが自分勝手な貧しい読みであったとしても、そ  
れを認めてやるところから出発する。読みの修正と深化は、  
友達の読みと交流するなかでなされていく。もちろん十分  
ではない。しかしそれでもいい。正しく読むことよりも、  
作品の中に自分なりのおもしろさを見つける、作品と向き  
合つ中で自分の価値観と出会って行く、それぞれが自分に  
とつての「城の崎にて」、自分にとつての「赤蛙」を語る  
ことができるようになる、そんな体験を持つことが必要な  
のではないだろうか。

(広島大学附属福山中・高等学校)